発行日　2009年6月20日（隔月20日発行）　通巻274号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター　会報誌
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

No.274
July-August 2009

東北タイの村で"変わる"若者たち

「タイの農村で学ぶインターンシップ・プログラム」の目指すもの

JVC Japan International Volunteer Center

特集

東北タイの村で"変わる"若者たち

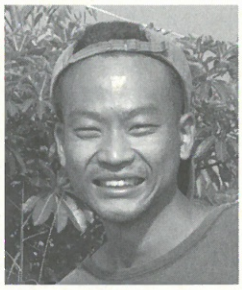
「タイの農村で学ぶインターンシップ・プログラム」の目指すもの

タイの東北部の農村に日本人のインターン生を送り込んで自分自身の生き方を振り返ってもらう――過去７年間続いていた「タイの農村で学ぶインターンシップ・プログラム」は、一時中断の後に現在再開している。インターン生個々人が「変わる」ことに意味をみるこのプログラムは、一見効率が悪いかもしれない。しかし、その一人ひとりの"根"はインターンでの経験を経て広く深く張られ、やがては地下深くを流れる慈愛に満ちた"水脈"に確実にたどり着く。JVCがこのプログラムに込める意味を、最新のインターンや受け入れ先の人々、OB/OGたちの話から確認した。（編集部）

「ひとりが変わること」の可能性

～国境を越えて種をまく～

タイ事業担当　下田（しもだ）寛典（ともの り）



大学在学中に本インターンシップ・プログラム（第四期）に参加。修了後、〇五年四月よりスマトラ沖津波被災地復興支援担当としてＪＶＣに参加。その後、緊急支援担当を経て、〇七年よりタイ事業担当となり現在に至る。

■ 交流と学びあいの場

二〇〇八年五月、ＪＶＣは「タイの農村で学ぶインターンシップ・プログラム」の第十一期生を迎えた。〇五年に派遣した第十期生を最後に一時中断していたが、〇八年度に再開を決めたのには理由がある。

ＪＶＣは、〇五年十二月まで地産地消（ちさんちしょう）を旨に村人による村人のための地場の市場づくりを進めてきた。最終的にこの「地場の市場」プロジェクトは、参加する村人の手で市場の自立運営が可能であることが確認され、ＪＶＣの支援活動としては終了した。この終了に伴ってインターンシップ・プログラムも中断したのだが、その際に確認されたのは、タイ国内のローカルＮＧＯや農民グループは自立運営できるほど力を持ちはじめてきており、タイはもはや支援を受ける側ではない、という認識であった。この認識は、これまでＪＶＣが関わってきたタイのＮＧＯや農民たちからもたびたび指摘されてきた点である。すなわち、日本とタイとの関係は「援助／被援助」の垂直的な関係ではなく、対等なパートナーとして交流と学び合いを深化させていく関係がふさわしい時代になった、ということだ。タイ・日本双方の交流と学びあいにつながるものとして、ＪＶＣはこのプログラムを再開した。

■ 日本もタイもともに学ぶ

さて、このプログラムの目的は単にＮＧＯ活動の技術や手法を学ぶものではない。国際協力に携わるために一番大切な意識や姿勢を学ぶことを目的にしている。それは、自分の常識で判断することなく、現地に住む村人の立場に立って相手の現実を事実として見る姿勢であったり、ＮＧＯ活動とはすなわち「人の生き方」に関わる活動であって、他人の生き方に関わる以上、自分の生き方が曖昧（あいまい）なままでは責任ある活動はできない、という意識でもある。

言うのは簡単だが、このことを腹の底から理解するには自分の考え方や行動をひとつひとつ見直し、自分自身で答えを出さなくてはならない。このプログラムは、タイの人々と生活することにより、人々が持つ「生きる力」や「地域の知恵」を認識し、自然と人間の調和を目指す持続的な社会のあり方を学ぶ場を提供している。このことは同時に、インターンを受け入れるタイ人もまた自分たちの伝統的な知恵・技術を再認識し、自らの実践に対して自信と誇りを持つ機会にもつながっている。

ただ、すべてのインターン生が修了後すぐに実効性のある活動をしているわけではない。このプログラムの成果が現れるのはもっとずっと先のことだし、修了生が一生をかけて体現していくものである。

私自身このプログラムの修了生であるが、その立場から言えることは、このプログラムを通じて自分自身が変わり、自分が目指すべき社会のビジョンを確実に手にした、ということだ。そして今では、ひとりの人が変わること・行動することが、ＪＶＣが目指す「本当の意味での国を越えた協力のあり方」や「自然と人間の調和を目指す持続的な社会関係のあり方」の実現に至る一番の近道だと考えている。

このプログラムは、言うなれば、持続的な社会をつくるべく、日本人とタイ人が一緒になって行なう「種まき」だ。いつの日かその種が芽を出し、世界・日本の各地域で魅力ある活動が次々に生まれていくにちがいない。

■インターンの日程表
（十一期の場合・〇八年五月～翌年五月）

五月上旬	日本国内研修（二週間） JVC東京事務所、千葉県の三里塚など
五月下旬	タイ国内研修（二ヵ月） 森本の農園（カオデーン農園）にてタイ語研修、農業実習
七月中旬	農村派遣 JVCスタディーツアーに参加
九月初旬	カオデーン農園にて中間報告会
十一月中旬～二月	NGO活動視察 フェアトレード団体、JVCラオス、南タイの在タイビルマ人団体など
三月中旬	JVCスタディーツアーに参加
四月	カオデーン農園にて最終報告会
五月上旬	帰国 日本での報告会

■インターンの日常の多くは、農民と同じく農作業に明け暮れる日々。そうした暮らしを送ることで、頭だけでなく体で「農村」を理解できるようになるのだろう。

他人と関わることは、自分と向きあうこと

タイ側現地調整役　森本（もりもと）薫子（かおる）

市場調査会社に勤務後、本インターンシップ・プログラム（第二期）に参加。その後、スタッフとしてタイに四年間駐在。現在は退職し、東北タイで有機農園を営みながらJVCなどのスタディツアーなどを受け入れている。

■「生きること」を考える

私は約十年前にこのインターンシップ・プログラムに二期生として参加し、その後スタッフとして三期生の後半から十一期生までを現地調整役として担当してきた。自分自身もそうであったように、このプログラムに参加するのは、国際協力や農村開発に携わりたいという意志のある者であるが、多くのインターンが「そもそも自分はなぜ開発に関わりたいのか？」という自分自身に対する問いに早い時期に突き当たることになる。

これは参加者の年齢や性格に起因（きいん）するわけではなく、開発に携わるためには無視できないプロセスだからではないだろうか。開発というのは、現場その地域の人の生活・生き方に直接関わる活動であることが主であるため、何を大切にするべきで、何を守りたいのか、その軸を持って現場の人と一緒に考えていくことが重要となる。自分自身については意識して真剣に考えたことがないままに、人のそれに関わることは難しい。「そういうあなたはどうなの？」と聞かれ、言葉をつまらせた経験があるインターンは多いだろう。人間として何が大切か。そこには人種を問わず共通するものがあり、それを自分自身について考えることにより、国境を越えた地域の人々とも同じ目標を持つことができる。開発を他人事だと考えて関わっているうちは、「自己満足」の域を出ないのである。開発プロジェクト運営上の手法やテクニックは後からついて来るもので、まずはその軸を考えることにインターン期間を費やすことになる場合が多いのだ。

しかし、そのシンプルな答えを見つけ出す過程はなかなか厳しいもので、派遣後数ヵ月にして泣くほど辛い思いをするインターンも少なくない。異国の地でほとんど言葉も通じない中、自分を徹底的に見つめ直す過程では、自分自身について見たくない部分も無視することはできず、逃げることもできないというかなりきつい状況なのである。参加前は、社会人だったにしろ学生だったにしろ、仕事や遊びで忙しく、実はじっくり考えたことがなかった「生きること」について。それが少しずつわかってくると、初めて国を越えて現地の人と気持ちがつながれることを実感する。

■人それぞれに活動する

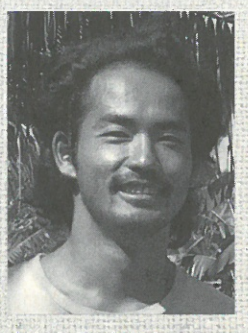
また、タイにはNGOなどの組織に所属せず、個人の社会活動家として活躍する人たちがいる。社会の中で不利な状況にいる人々の生活をどうしたら改善できるかを共に考え行動することが必要だと考え、自分の生活の一部として、生き方としてその道を選んでいる。このプログラムでは意図してそのような人たちとインターンとの出会いの場を提供するようにしている。インターンはそのような人たちと出会うことにより、開発とは、専門の国際機関やNGOに所属しているから行なうという職業のひとつではなく、規模の大小はあるにしろ、地球住民なら誰もが責任を持ち行動しなければならないことだと考えるようになる。自分が一番関心のある・得意である分野、あるいは自分の置かれた環境、縁などから、既存の職業にこだわらず自分のスタイルを見つけ出し、様々な角度から開発に携わることはできる、と理解するのだ。

これまでのインターン修了生が今現在進んでいる道が、NGOなどの開発機関だけではなく多様であるのは、このためではないだろうか。

■滞在中に２人が日本の支援者に向けて書いた手紙。それぞれ合計数十ページになる。

受け入れてもらった２人

一年間の東北タイでの生活を経て先日帰国した第十一期インターンの２人。その経験から見えてきたものを聞きました。



金森（かなもり） 史明（ふみあき）

八〇年生まれ。大学卒業後、企業で営業職、フリーター、ＮＧＯ職員と経験するうちに、日本の社会や国際協力のあり方について考えるようになる。その中で食料自給率を糸口に農業にも関心がわき、インターンに応募した。

改めて、自分の寄って立つ足元を見る

インターンとしてタイに行く前は、国際協力や開発とは、発展途上国を先進国のようにすることだと考えていました。しかし発展途上国と言われるタイの農村に行き、日本に比べればモノも便利さも少ないながらも「充分に」「充実した」生活ができたこと、先進国の生活システムや主義主張が環境や世界に及ぼす悪影響を省みる機会があったことから、この考えは誤りだったと痛感しました。そして国際協力や開発とは「地域に立脚し環境に負担をかけない社会・世界を構築すること」だと考えるようになりました。

日本はまだそうではありません。日本のあり方や問題を改善・解消し、日本が海外や環境に与える悪影響を減らすことも国際協力でしょう。これを実践するために今の僕ができることは、自分の生活を見直し改善していくことです。これは海外に行く必要もなく、誰でもどこでもできることです。今後、同じ考えを持つ仲間を増やしつつ、少しずつ着実に実践していくつもりです。

■受け入れ先のお母さんと。タイ語に苦労していた金森君を心配していたそうだ。

宮田（みやた） 敬子（けいこ）

ＮＧＯのスタディーツアーに参加する中で農村開発とは何なのかと疑問を持ち、インターンに参加した。現在は引き続きインターン生としてカオデーン農園を拠点にして東北タイの農民から様々なことを学んでいる。

本気で向き合ってくれた「お母さん」

東北タイの農民は農業で生計を立てていけず、経済的に貧しく、そのため出稼ぎに行かなくてはならない可哀想な人々であると思っていた。その苦労や困難を理解しなくては農村開発などできないのでは、という考えで村に入った。

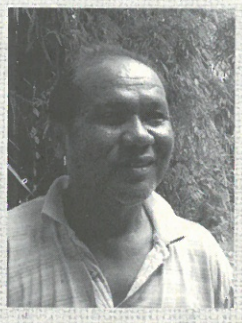
しかし、受け入れ先のお母さんに「あなたがどんなに大変な農作業をしようと農民の苦労はわからない。本当に辛くて大変なことばかりなのだから」と言われた。その言葉が私の胸に突き刺さった。同じように農作業をし、食事をし、共に生活していけば農民の気持ちが少しはわかるだろうと甘く見ていたのだ。わずか数ヵ月で農民の気持ちなど簡単に理解できるはずは無いのだと、やっと気付いた。

では、の立場で何ができるのか。受け入れ先のお父さんは耕す土地があって、助け合える家族や仲間がいることが彼らにとっての幸せであると教えてくれた。今は、その幸せの価値観を共有すること、これからの社会で何が大切であるかを共に考えていくことが私のできることではないのかと思っている。

■受け入れ先の家族と。

受け入れる人たち

若いインターン生を受け入れてきた人々にお話を聞きました。



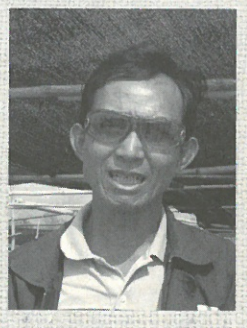
カセームさん

ポン郡で有機農業を実践している農家であると同時にポン郡有機農産物直売市場運営委員会の副委員長でもある。インターン十一期生（宮田）の受け入れ先。

自分の有機農業に自信を持てるようになる

インターン生は私たちから学ぶことを目的として来ているので、私たちもそれに恥じないような生活や農業をしなくてはならないと思っていました。私たちは外部から購入しなくても食べ物や生活に必要なものは自分たちで作り出せます。そのことをインターン生には学んで欲しいと思います。

インターン生を受け入れることによって、他の村の人たちが私たち家族の自給自足を目指す農業に興味を示すようにもなったと感じました。また、町の消費者もこの農園に見学に来るようになったのです。それによって私自身も自分の農業に自信が持てるようになりました。これからも日本とタイがこのような形で交流できたらよいと思っています。



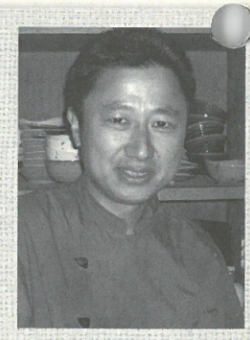
チュアムさん

ポン郡で有機米を作っており、自給自足の生活を目指している。ポン郡有機農産物直売市場運営委員会委員長であり、十一期生（宮田、一ヵ月間）と十期生を受け入れた。

修了後も社会をつくる活動を続けてほしい

現在の社会は経済発展のみを目指し、競争する社会でしかありません。私たちはもっとお互いに助け合うような社会を作らなくてはならないと思っています。豊かな自然環境があれば私たちは充実した暮らしが送っていけることを、インターン修了生には伝えていってもらいたいです。

また、インターン修了後にはビジネスでも農業でも職業は何でもいいので地域のことを考えた活動を行なってほしいと思っています。環境破壊による地球温暖化は私たちが少しでも森を増やすことで解消の方向に向かうのではないでしょうか。今後、インターン修了生は何かの団体を作ることや小さな行動でもいいので私たちと共に良い社会を作っていってほしいです。



松尾（まつお） 康範（やすのり）さん

アジア農民交流センター（AFEC）事務局長、酒肴工房『百年の杜』店主。本インターンシップ・プログラムの立ち上げに関わる。

時には「越境」しながら暮らしていこう

九四年、その当時インターンという枠はなかったけれど、JVCタイの活動地に一年間お邪魔する機会を得た。タイで最も貧しいと言われている東北タイで自分自身の貧しさを知り、衣食住医を日々の生活の中で創りだす東北タイの人たちに多くのことを学び、お世話になった。

インターンの仲間たちへ。帰国して、憧れの「地の人」※みたいになろうだなんて大それたことはあせって考えない方がいいよ。越境できるときは越境！ それが君のアイデンティティーになれば、やがて「地の人」と対等な交流ができるから。「地の人」の切実な思いを理解して越境する人がいなければ、いまの世は変わらない。

現在、僕は神奈川県の久里浜で居酒屋を経営している。「越境」を合言葉に活動しているアジア農民交流センター（AFEC）やJVCの仲間たちと立ち上げた東北タイの「地場の市場づくり」を、場所を代えてやっているようなものだ。そんな所がひと時でもインターンの受け入れ先になるなんて、こんなにうれしいことはない。でも、調子に乗ってインターンたちを一軒目で酔わせてはいけないな。二軒目となるタイで泥酔してもらい、NGOの世界にどっぷり浸かってもらいたいからだ。

※「地の人」＝インターンが東北タイで出会ったような、地域に根ざして自立した生活を営んでいる人々のこと。

■インターン修了生一覧

第一期 (1998.10～1999.10) 1名(女性1/男性0)

第二期 (1999.10～2000.10) 3名(女性2/男性1)

第三期 (2000.5～2001.5) 5名(女性4/男性1)

第四期 (2001.5～2002.5) 6名(女性5/男性1)

第五期 (2001.11～2002.11) 4名(女性3/男性1)

第六期 (2002.5～2003.5) 4名(女性2/男性2)

第七期 (2002.11～2003.11) 2名(女性2/男性0)

第八期 (2003.5～2004.5) 4名(女性3/男性1)

第九期 (2003.11～2004.11) 4名(女性2/男性2)

第十期 (2005.6～2005.12) 2名(女性1/男性1)

第十一期 (2008.5～2009.3) 2名(女性1/男性1)

■第十期修了後につくったアルバム。
汗と涙と笑いと気づきをつづった146ページ！

これまでと、これからと。

これまでのインターン修了生からお話を聞きました。

芦川雄一郎（第三期）

工事現場 → **百姓へ。**

渡タイ前は、工事現場の仕事をしていました。インターン参加時にはNGO活動にも興味がありましたが、一年間の活動を通じて、家の周りにおいしい野草や果物があり魚は網を投げて取り、豚は自分でさばく、友人たちと苦楽を共にし生きる、町の生活に慣れていた私はそこに厳しさと豊かさを感じました。タイ生活で自分は自然に沿った暮らしが好きだということがわかりました。帰国後、アルバイトをして元手を作って福島県で農業研修をして、晴れて独立。今は百姓生活をしています。

吉澤武志（第六期）

東京藝術大学大学院
→ **農的生活＋地域活動へ。**

インターンの一年間は、まさしく生き方を見つけた一年でした。タイの人々と触れ合い、彼らの生活上の課題をともに悩み、方向性を探る中で、自分はどうなんだろう、自分の国はどうなんだろう、とつねに考えていました。そして行き着いた答えが、自分自身の生き方を変えることでした。インターン生活のおかげで、自分にとっての国際協力とはどのようなものか、自分自身・一人ひとりがどのような生き方をすることが世界を変えていくのかが少し見えたような気がします。

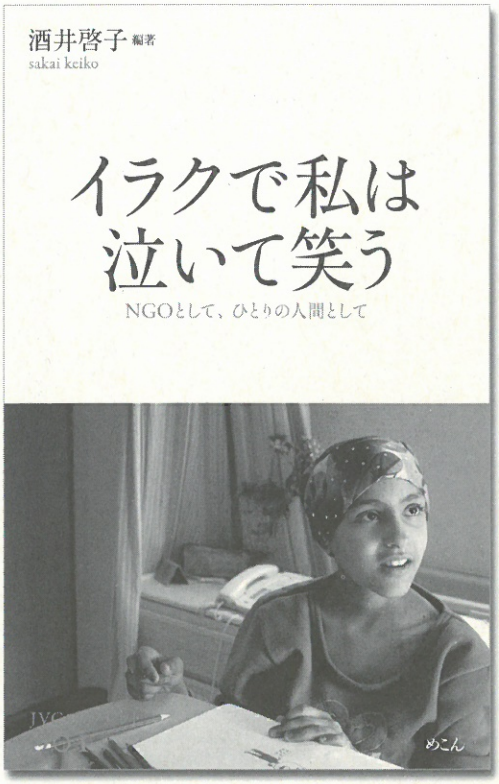
見出した信念を実践する人生

インターンは、毎年（若干名ではあるが）着実にその数を増やしている。すでに修了したインターン生は、五年経ち、十年経ってそれぞれの道を歩み始めている。NGOに関わる人もいれば、就農した人もいるし、栄養士や整体師として人々の健康に貢献しようとする人も出てきている。それぞれに自分の得意なことを見つけ、できることを実践している。インターン生が一年間のタイ滞在を通じて共通して得るものは、**「社会を変えていくために自分がまず変わり、そして実践していく」**という信念であり、これからの修了生たちの実践こそが、この研修プログラムの果実である。今後のインターン修了生たちの生き様を見守って欲しい。

（下田）

国際社会のありかたを地平線から見つめていく——
「JVCブックレットシリーズ」を刊行。

001

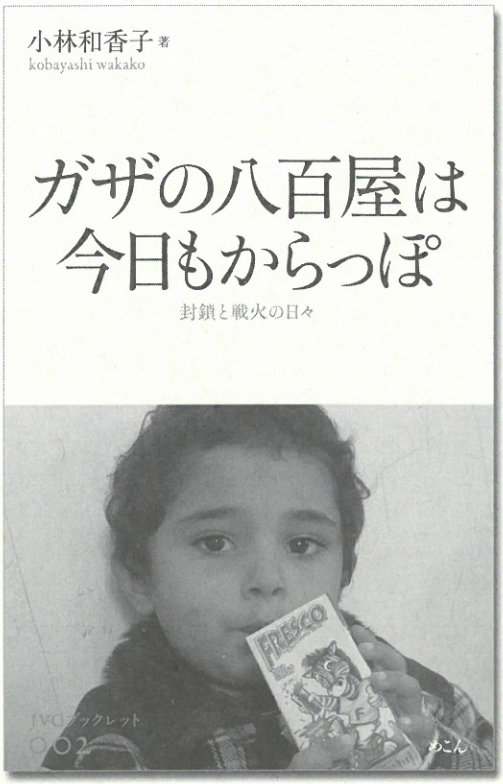


イラクで私は泣いて笑う
NGOとして、ひとりの人間として

東京外国語大学大学院教授
酒井啓子 編著　　定価 920円＋税

イラク研究の第一人者である酒井氏が、NGOスタッフ、フリージャーナリストと対談。戦争で破壊された社会を生きる人々に、私たちは人間としてどう関わることができるのか。混沌としたイラクの今を、生身の人間同士の付き合いから読み解く一冊。

002



ガザの八百屋は今日もからっぽ
封鎖と戦火の日々

JVCエルサレム事務所前代表
小林和香子 著　　定価 840円＋税

「昨日も夜中に突然子どもの名前を叫んで起きたの——」昨年末からイスラエルによる激しい軍事攻撃を受けたパレスチナ・ガザ地区。母親、子ども、現地NGOスタッフ等の肉声を、支援の最前線から伝える。60年にわたって追い詰められてきた人々の嘆きと願いを通して、パレスチナ問題の根源に迫る。

2009年
6月13日発売

発行 めこん

このブックレットのシリーズでは、情報と感動をコンパクトに提供できたらと思っています。今の時代、いくら遠くであってもアフリカや中東の出来事が自分とまったく無縁だと思っている人はあまりいないでしょう。でも、それがどうつながっているのかよくわからない。自分はどうすればいいのかもわからない。結局自分で考えるしかないわけですが、その一助になれたらとそっと思っています。感動は共感と言ってもいい。孤独じゃないんだという気持ちになってもらえたらいいのですが。

株式会社めこん　社長　桑原晨

■ご購入は、JVCまでご連絡いただくか、全国の書店でお求めください。

第十回ＪＶＣ会員総会 報告

会報誌レイアウト／総務担当　細野 純也

〇九年六月十三日、第十回ＪＶＣ会員総会を東京・池袋で開催しました。五十七名の正会員の方が出席され、委任状と合わせて定足数を満たしました。

■〇九年度の地域開発活動の計画を発表するカンボジア事業担当の島村。

最初に、代表の谷山博史からあいさつがありました。ＪＶＣがこれまでの活動で獲得してきた二つの知恵は、「歴史を見通す知恵（「対テロ戦争」や経済のグローバル化は以前から構造としてあり、いまや飽和状態にあること）」「グローバルな問題がローカルな草の根の取り組みの積み重ねのなかで解決されることを知る・信じる知恵」であると指摘しました。そして、そうした知恵や経験を蓄積し広めるためのブックレットシリーズの紹介がありました。

■議案①・

〇八年度活動報告・決算報告

まず事務局を代表して事務局長の清水俊弘が、世界の課題の認識の確認とともにそれとＪＶＣの各活動との関連性を明示して、〇八年度の各活動現場および日本国内での活動の概観を説明しました。続いて、事務局の川合千穂、寺西澄子、広瀬哲子が、地域開発活動、人道支援活動、国内活動についてそれぞれ報告を行ないました。その後、経理担当の武繁政昭から決算報告があり、続いて監事の黒田かをりから、〇八年度決算は適正に実施されているとの報告がありました。また、将来の外部監査にむけての体制強化を継続してほしい旨の指摘がありました。その後に質疑応答を行ない、報告・決算は承認されました。

■議案②・

〇九年度活動計画・予算案

はじめに代表の谷山から、〇九年度における団体としての問題意識および各活動に関する概要を説明しました。続いて、事務局の島村昌浩、長谷部貴俊、荻野洋子から、地域開発活動、人道支援活動、国内活動の各計画について説明しました。予算案の説明を武繁から行ないました。その後に質疑応答を行ない、計画・予算は承認されました。

08年度報告・決算に関する主な質問事項

質問①・ラオスなどでの活動に関して。なぜその土地を最もよく知る農民にＮＧＯが稲作の技術訓練をする必要がなぜあるのか。
▼人口の増加や収量の低さなどから米不足は恒常的な問題。伝統的な農法に少し改善を加えることで米の増産につながるアドバイスをしている。

質問②・北朝鮮情勢が依然厳しいが、今後の活動のスタンスは？
▼市民レベルでの交流が可能なうちは継続したいが、大々的に活動を打ち出しにくい。より効果的な手段を検討したい。

質問③・アフガニスタン情勢が緊迫しているが、どう現地での安全を確保しているか。
▼とにかく目立たないこと、治安情報を得るルートを数多く確保することなどを実践中。日本人の長期滞在も中断している。

09年度計画・予算案に関する主な質問事項

質問①・助成金や補助金に関して予算通りに獲得できる見込みは？
▼確実性は見ている。アフガニスタン事業で申請中の外務省の補助金についても適用期間について担当者間で調整している。

質問②・在タイビルマ人支援について。どのくらいのビルマ労働者がいるか。支援の予算額が少ないのでは。
▼好調なタイ経済を支えているのはビルマ人などの低賃金労働者だと言われている。詳細な数字は出せないが増えていることは確か。ビルマ人ＮＧＯの活動を側面支援する形なので少額。

質問③・タイスタディーツアーについて。参加者に期待するものは何か。参加者数・費用・ターゲット層を知りたい。
▼人数は通常十数名程度。費用は自費で約十七万円。ＪＶＣのビジョンに共感する人を増やしていきたい。

質問④・日本のＯＤＡに関する質と量の議論に関するスタンスは。
▼援助の効果を問う議論が国際的に進むなかで、援助の質を高める中で量を増やす方向での代案を考えていきたい。

質問⑤・パレスチナや南アフリカのクラフトを国内で販売しているが、「フェアトレード製品」と説明してよいか。
▼「フェアトレード」としての事業展開は考えていない。日本の市場に依存してしまうと、そのルートが無くなった時に活動自体も壊れてしまうリスクが大きい。

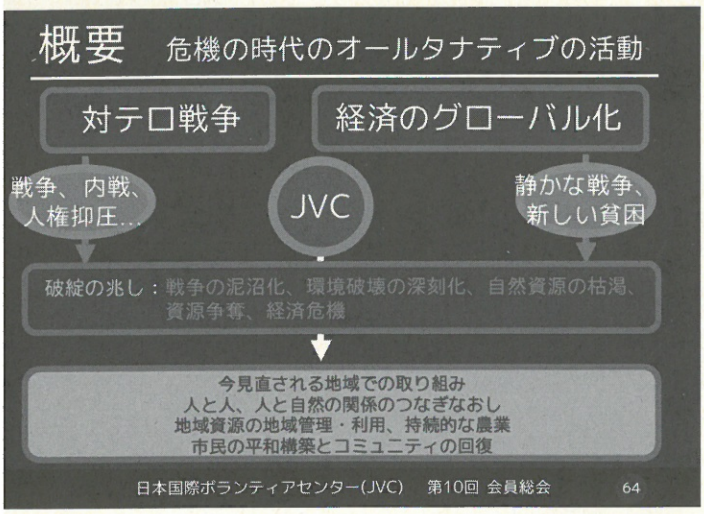
意見①・物販の際にそれが説明できる紙などを事前にスタッフとボランティアとでいっしょに用意するのはどうか。

質問⑥・ＪＶＣはＧＣＡＰ-ＪＡＰＡＮへは参加しないのか。
▼フレンズ会員として参加している。

意見②・（会員を増やす意思があるなら）国内でのボランティア活動や講演会がどれだけ開催されたか具体的に示してほしい。会員総会の場でも会員やボランティアに支えられていることをきちんと報告すべき。

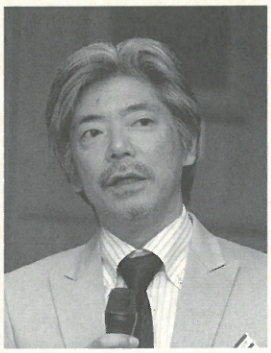
意見③・総会に来られない会員に総会の内容をより伝える仕組みがほしい。
▼報誌での簡易的な報告だけでなく、ホームページなど他の手段も検討したい。

■各国での活動の報告、計画と会計書類をまとめた『活動報告』は、本誌 No.276 として、次号（No.275）と同時に８月末にお届けする予定です。



「対テロ戦争」と「経済のグローバル化」に起因する各種の世界的なひずみに対して、JVCの各地での活動＝オルタナティブな取り組みがチャレンジしていく、というイメージ。09年計画の説明で谷山が提示したもの。

代表・谷山のあいさつから



――昨年十一月、あるイベントでスピーチさせていただく機会をいただきました。千人あまりの聴衆の方々を前にして、そのとき私はこう話し始めました。「JVCは、経済のグローバリゼーションと対テロ戦争によって生命と人間の尊厳と生活の糧を奪われようとしている人々を支援し、彼らと同じ目線から、戦争と経済的な収奪の実態を告発し、問題解決の代案を提示しようと試みてきました。

たった百人たらずの小さな団体がえらそうなことを言うようですが、私たちにはひとつの信念があります。非暴力による紛争解決はありうる、それは対話によって可能である、ということ。そして、市民の主体的な参加によって初めて対話と融和のためのスペースを構築することが可能である、ということです。これは二十八年間の現場での活動から培われた信念です――」

同日開催
JVC会員の集い

地域を変える ～タイ、ラオス現場からの声～

会員総会の後、恒例の「JVC会員のつどい」が開かれました。今年は、栃木県のアジア学院に留学中のJVCラオスの農村開発担当・フンパン、タイの「オルタナティブ農民ネットワーク（AAN）」で活動するジャンワンさんを迎え、ラオス、東北タイの人々の声を聞かせてもらいました。

森が奪われ、貧しい人がますます困っています
JVCラオス農村開発担当　フンパン

ラオスの村の問題はいろいろありますが、まず教育が十分に受けられないことです。貧しいために勉強する機会がなく、学校が無い地域もあります。私自身もそうでしたが、今も一部の子どもは学校に行けません。

保健の面では、衛生的な飲み水、生活用水がともに不足しています。病院がなく、薬もありません。伝統的な薬や祈祷師では、マラリアのような病気を治すことはできません。また、村には仕事がないので農閑期に他国への出稼ぎに行きますが、それでエイズにかかってしまったりして、本当に大変です。

近年顕著なのが「森の幸」が減っていることです。以前は米がない時には森から採取できる食べ物で何とかしのげていましたが、その森がなくなってしまうのです。儲かるからと、ゴム植林や工場建設が行なわれてしまうのです。これによって一番の被害を受けているのは貧困層なのです。そうした中で、JVCは農業と森林を守る活動をしているのです。

化学肥料で借金、負のスパイラルに
AAN　ジャンワンさん

東北タイの農民がかかえている問題は、借金です。化学肥料や農薬を買うために借金をするのです。普通は一回の耕作に四～五回化学肥料や農薬を使います。借金を返すために、収穫をあげるためにたくさんの化学肥料を使う。それでも収穫が少なければ、さらに借金して買うことになります。悪循環、負のスパイラルです。それで自殺してしまう人もいます。

近年ブームになっているゴム植林でも同じです。最初の頃は高く売れましたが、十年経って生産者が増えたこともあって売価は半分になっています。ゴム植林でも農薬を買うお金が必要です。

私たちの活動は農業の回復、昔ながらの農業に戻していくことです。まずは自分たちが食べるものをつくり、その余剰を売る農業なのです。JVCは以前東北タイで自然農業を提唱して朝市の活動をしていました。残念なのは、今現在JVCの常駐スタッフがタイにいないこと。やはり、農民も外からの人がいると自分の励みになりますから。

日本での学びがラオスの将来につながる。フンパンの留学費用（210万円）をサポートしてください！

今回話してもらったフンパンは、現在栃木県のアジア学院で農業知識とともに農村リーダーの資質を学んでいます。ラオスの人がラオスの将来をつくっていけるように、ぜひ彼の留学費用をサポートしてください。募金の際に「ラオス奨学金」とご指定ください。

スタッフのひとりごと

家族もニッコリ、シャトルシェフのおかげです。

タイ事業担当　下田 賓典

イラスト／かじの 倫子

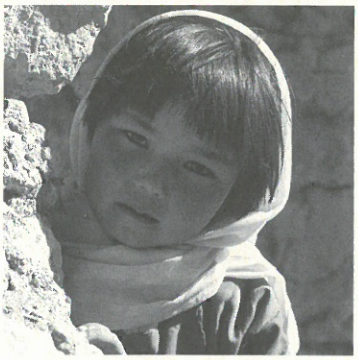
僕は今「シャトルシェフ」に夢中です。シャトルシェフとは真空保温調理器のことで、専用の鍋とその鍋を保温する容器とに分かれています。うたい文句には「時間と手間をかけずに、エネルギーを節約して素材のおいしさを生かします」とあります。鍋で加熱調理して保温器に入れておくと、そのまま加熱状態が続き煮込んでおいてくれるのです。

「ほしい…。でも、高いなぁ」と思っていたところに、なんと結婚祝いに頂戴してしまいました。かなり舞い上がってしまい、すぐに同封のレシピ集をめくり、「善(膳)は急げ！」ということで、スーパーに駆け込み材料を買っていざ調理開始。煮込み始めて沸騰したら保温器に入れるだけ。寝ている間に勝手に料理してくれるこれぞ"魔法の鍋"。思った以上に使い勝手も良く、何より火にかける時間が短くてガス代を節約できる。完全にハートをわしづかみされて、煮豚に煮豆にキーマカレーにとフル回転です。今年の目標である料理の腕はめきめき上がっています。と、同時に我が家のエンゲル係数も上がりっぱなしです。

みるよむきく

映画『子供の情景』

監督：ハナ・マフマルバフ／イラン・フランス合作／81分



僕が映画を鑑賞する目的は、ストーリーや映像を楽しむことと、作品のメッセージについて深く考えることの二つです。アフガニスタンを舞台にした映画『子供の情景』の場合は、間違いなく後者です。これまで、いろいろな映画が僕の人生に影響を与えてきましたが、この映画もそんな一本となりそうです。

この映画は、ひとりの少女の小さな冒険を通して、戦争の悲惨さ、暴力が子どもに与える影響を描いています。イラン人の若手女性監督であるハナ・マフマルバフは、子どもたちの優しい表情をとらえていますが、一方でアフガニスタンの厳しい現実もまっすぐに表現しています。同じアフガニスタンを舞台にしたハリウッド映画であるマーク・フォスター監督作品『君のためなら千回でも』では、少年たちの友情を通してアフガニスタン人の明るい側面が表現されています。この『子供の情景』と『君のためなら千回でも』は、その意味では対照的な映画かもしれません。

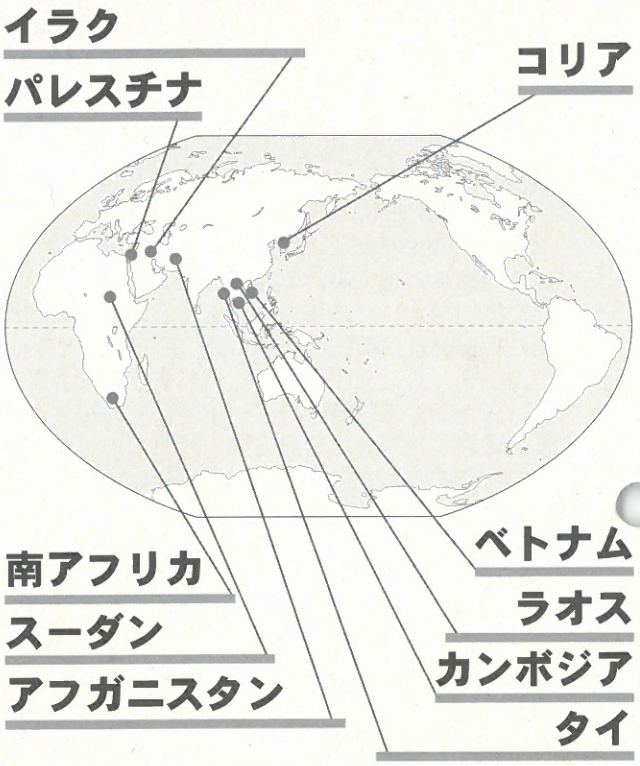
やや計算されすぎた感のあるストーリーにもかかわらず堅苦しい感じがしないのは、主人公の少女の素朴さ、かわいらしさ、そして芯の強さによるものだと思います。後でパンフレットを読んで知ったのですが、主演の少女自身は、実際の年齢より上のクラスに入って勉強しているそうです。そのことを知って、彼女のしっかりした演技にもなるほどと納得できました。

学校に通うために必要なノートを手に入れるために友だちの男の子と奮闘する少女の姿や、周囲からの嫌がらせを乗り切るために「死んだふりをしろ。死ねば自由になれる」というセリフがでてくることから、困難な中で生きていくためには力強さとしたたかさが必要なんだと改めて感じました。

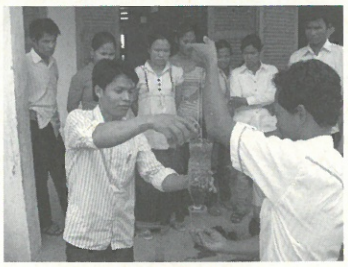
（経理・労務　武繁 政昭）

■全国各地で上映中。詳細は『子供の情景』公式サイト http://kodomo.cinemacafe.net/ にて。
自主上映についてのお問い合わせは、ムヴィオラ 03-5366-1545 まで。

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。



カンボジア


■環境教育の講座の様子。水をろ過する実験に参加した先生も興味津々。

■生態系に配慮した農業による生計改善（CLEAN）

07年からシェムリアップ県東部の35村で活動を行なっている。3月の終わりに、各集合村でワークショップを開催し、1年間の活動を振り返った。ワークショップでは、より多くの村で農業研修を実施してほしいとの要望が参加者から寄せられた。また、田植えのシーズンが近づいてきたため、稲作栽培技術に関する夜間ビデオ上映会を各村で実施している。

■環境教育

これまでカンダール県オンスノール郡で行なってきた環境教育であるが、4月からシェムリアップ県東部の4つの小学校で新たに実施することになった。5月にこの4つの小学校の教員26名を対象に「環境教育ファシリテーター養成講座」を6日間にわたり実施した。今後、各小学校を中心に環境教育を実施していく。

■資料・情報センター（TRC）

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供している。事務所が移転したこともあり、昨年度は利用者が減少したが、今年は大学生などを対象にオリエンテーションを積極的に実施し、多くの人に利用してもらえるよう準備を進めている。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を開始した。工場の案内や看板などを設置するなどの改善を行なった結果、4月中旬のクメール正月以降、修理に来る車の台数が徐々に増加している。（以上山﨑）

ベトナム

■農村開発と今後に向けて

99年からホアビン省で実施してきた住民参加型農村開発事業は09年3月をもって終了した。現地代表の伊能が帰国し、これまでご支援くださった方々へ活動報告とお礼をするために訪問した。また、今後のベトナムとの関わりについて、住民参加型農村開発事業の成果を見ることを目的として、09年度中にホアビン省への訪問を企画することとなった。（谷山）

ラオス

■力を合わせてたい肥小屋作り

■森林保全／農業・生活改善事業（サワナケート県）

3月末にブルー／マコン語を母語とする少数民族のスタッフが着任。ラオ語を話せない村人はより発言力が低く貧しい可能性が高いので、そういった人々の声を拾っていきたい。新戦力を得たこともあり、活動対象村を拡大すべく3月末に数村の視察を行ない、4村を選定（これまで活動してきた2村と合わせて計6村）。5月より参加型調査を行なっている。それぞれに特徴があり、リソースとなりそうな村人もおり楽しみである。

共通する点は企業による土地の接収問題を抱えていることであった。K村で要請のあった魚の保護地区設置に関して、成功事例のある他の村へのスタディーツアーを森林チームが実施、ノウハウを得るとともに村人の士気も高まった。農業ではたい肥研修を4回ほど実施。村人の関心は高く、たい肥の作り方のポスターを作ったのも良かった。

4月には首都ビエンチャンにおいて政府の新土地利用マニュアル作りに関する会議に出席。NGOとして村人の立場に立った政策作りに貢献する道を探る。（平野）

スーダン

■安全講習を受け、マスクを浸けて作業にあたるスタッフ。

■車両整備を通じた難民帰還支援

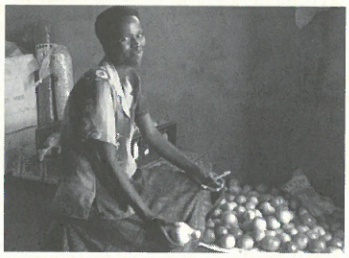
国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）との事業提携契約に基づき、「車両整備による難民帰還支援事業」と、元難民の若者を対象にした「整備士研修による帰還民定着支援事業」の二本柱による活動を実施している。

3月末、事業当初より活動を支えてきた日本人車両専門家の井谷が任期を終了し離任した。日本人専門家に代わり、周辺国のウガンダ、ケニアから採用した整備士、そして成長著しいスーダン人若手整備士たちが協力して業務を引き継ぐ。研修生に対する講義については、政府の職業訓練所で30年のキャリアを持つスーダン人専任講師を採用した。

4月に安全作業講習会を開催。研修生、スタッフを問わず全員が参加し、安全作業について学習、討論した。「いままでは普通の靴で作業をしていたが、工場内では安全靴が欠かせない」「バッテリー溶液を作る際に、マスクなしでは肺に悪い」など、さまざまな提案が出された。安全靴、マスク、溶接用ゴーグルを早速購入し、作業中の装着を義務付けた。

石油収入に依存する南部スーダン政府の09年度予算は、原油価格下落のため当初計画よりも40％程度縮小され、公務員の給与不払いの深刻化などが予想される。異なる民族グループ間の抗争も激化しており、2010年2月に実施予定の総選挙に向け、政治状況は予断を許さない。（今井）

南アフリカ



■自宅でとれたトマトを販売するHIV陽性者のセリーナさん。

■HIV/エイズ(リンポポ州)

農村でのHIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくり、患者や孤児へのケアを行なっている。これまでの活動は09年3月をもっていったん終了。05年度以降からの活動の振返り（08年11月に実施）を受け、09年度は一年間限定の延長期間としてHIV/エイズの治療に関する研修、栄養改善のための菜園づくりの活動を継続することとなった。08年度は劇を通して予防啓発活動を行なう青年たちへの研修を週末に実施、予防啓発メッセージの伝え方やシナリオ作りなどを学んできたが、3月に新たなシナリオが完成し、現在はこれに沿って青年たち自身で演技の練習に励んでいる。

5月4～8日に、09年度の活動準備として、治療に関する研修、菜園研修参加者の選定、現地NGOとの研修内容の調整を行なった。今後これに基づき活動を実施していく。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用した地域住民対象の菜園研修を実施していく。これまでも自分たちで少し菜園づくりをしている人たちを対象とする。5月11～14日には、菜園参加者候補者が約30名集まり、研修内容や進め方について話し合い、年間スケジュールを確認した。同時に各菜園を訪問し、実施状況や作物の利用状況を確認、各参加者の目標の設定などを行なった。（以上渡辺）

イラク

■イラク市民社会連帯会合。

■国内避難民支援

現地の団体と協力し、イラク国内で困難な状況にある避難民家族を対象に食料支援の実施を計画中。6月以降の3ヵ月間、現地にモニター担当者を置く予定。

■中東フォーラム（3月21日＠東京）を開催

JVCパレスチナ、アフガニスタン両事業と連携し、イラク戦争開戦後6年を機にトークセッションを開催。『それでも希望はある！』と題し、3ヵ所の現地出身者で日本在住のゲストを迎え、出身者ならではの視点から現地の問題と、解決に向けて日本社会への期待の声を聞いた。

■イラク市民社会連帯会合（3月28～30日＠ローマ）に参加

治安の問題でイラク現地訪問が容易でない中、現地の市民の一員としてのNGO、労組、学者などの幅広い分野の人々と交わり意見を交換する貴重な場となった。（以上谷山）

タイ

■インターン生の報告会。

■農村派遣研修

国際協力や自然環境保護に関心のある人を対象に、タイの農村に派遣し、「開発」や「NGOの役割」について村人と一緒に考え・学ぶ研修プログラムを実施。研修生2人ともに4月までに無事に帰国した。5月9日には都内で報告会を開催。「私たちの暮らしと海の向こうに住んでいる人たちとはつながっている。日本に居ながらも環境にいいことを暮らしの中に取り入れて小さな実践を積み重ねていくことも、国際協力の一部である」というメッセージを投げかけた。研修生のひとりはもう一年間インターンを継続することにし、5月15日にタイに渡った。

■南タイでの在タイビルマ人支援

南タイの在タイビルマ人を対象に、健康被害を負う患者への医療支援を現地NGOの側面支援として開始した。建設現場で働くビルマ人労働者が怪我を負い、緊急処置を受けるための交通費や治療代をJVCは支援した。（以上下田）

パレスチナ

■子どもに栄養治療食を食べさせるお母さん。

■ガザ緊急支援

08年末からのイスラエルによる攻撃で大きな被害を受けたガザで、2つの緊急支援を現在も実施中：現地医療NGOを通しての救急キット支援と、栄養失調児への支援を行なっているハンユニスの栄養センターで子どもたちへの生鮮食料品の支援。

■ガザ栄養改善支援

ガザの幼稚園児約320名への栄養改善支援。西岸ヘブロン産牛乳とラマッラー産ビスケットを配布中。ハンユニスの栄養センターで栄養失調児への治療用栄養食として家庭への持ち帰り用乾燥食材を提供。停戦後、新たにセンターを訪れる栄養失調の子どもたちが増加している。

■健康教育・巡回診療支援

壁の建設により地域の分断が進む東エルサレム地域で、医療NGOによる保健教育・巡回診療活動を実施。壁の両側の学校や幼稚園などで活動を行なった。3月末には東京担当が活動を視察。現地医療チームと活動内容について協議。

■収入創出支援

ベツレヘムの難民キャンプ内のハンダラ文化センター女性グループの刺繍（ししゅう）プロジェクトを支援。平和念珠作りも継続。3月末には念珠作りの女性たちをアーユス仏教国際ネットワークのメンバーが訪問、交流の機会を持った。

■アドボカシー／平和創造・平和構築

東西エルサレムの女性たちのエンパワーメントを目指したプロジェクト支援を継続中。また、3月には仏教者を迎え、エルサレム、西岸の大学などで、現地宗教者および学生たちとの対話の機会を持った。（以上小林、福田）

アフガニスタン

■研修後、授業への意欲が増したという小学校の教師。

■女性と子供の健康改善のための地域保健事業

診療所では家族ごとに病気の診断や薬の処方を管理するためのファミリー・ヘルスブックおよびファミリー・カード（診察券）を導入するため、すでにこの二つを利用しているNGOの診療所を訪問し情報収集を行なった。また簡易診療所があり病気予防に関心の高いクズ・カシュコート村で活動地域では初めての保健委員会設立の準備が始まった。

■教育支援活動

1、2月に実施した教員研修のフォローアップとして無作為に学校を選び、研修を受けた教師の授業見学を行なった。その中で、以前より熱心に教案を作成し授業でも積極的に生徒に発言させる教師もいればまだ自信がなくそもそもできない者も見受けられた。またこの間、研修後のフォローアップの必要性を現場の教師から強く要請された。

■政策提言・ネットワーク

今年8月実施予定の大統領選挙に向け、選挙管理委員会からゴレーク診療所を選挙人登録所として使用したいという要請を受けたが、反政府グループからの攻撃の的になりやすく患者や周辺の村人にも危険が及ぶことから、他NGOの動きとも合わせ使用を断った。（以上長谷部）

調査研究・政策提言

■第7回国連改革パブリックフォーラムを開催

3月30日、第7回国連改革パブリックフォーラムをJICA国際総合研究所で開催した。今回は、国際金融問題を筆頭に核軍縮、UPR（人権の普遍的・定期的レビュー）、平和構築委員会の評価などについて意見を交した。

■ ODA改革関連

（1）第23回及び第24回JICA環境社会配慮ガイドラインに関する有識者委員会に出席。現在、JICA事務局が作成した素案をベースに検討を加える作業を進めている。新ガイドラインの完成は今年秋頃の予定。

（2）CSOネットワーク主催の「開発効果の潮流と市民社会の動向」セミナー（5月14日）にコメンテーターとして参加。援助効果向上に関する「アクラ後」の最新論点と国際CSOの動き、そして日本のNGOの役割について、議論した。（以上高橋）

コリア

■仲良くなったともだちとともに「平和の木」を描く。

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎国内巡回展

4月下旬、東京・小平で展示会が開催された。小平周辺の子どもたちの絵も展示され、500名近くの来場があった。会場に設けられた大きなボードには、「夢いっぱいの子ども達、国境はなくして世界中から戦争がなくなることを願います」「南北コリア、日本そして世界中の子ども達の笑顔が失われないように手を取り合って守っていきましょう」などメッセージが多数寄せられた。

◎東京ワークショップ

『ともだち展』09年度のスタートとなる、東京でのワークショップが5月16日に開催された。韓国の子ども7名が来日、日本の子どもたち約20名とゲームなどを通じて交流したほか、韓国の絵本作家・柳在守（リュウ ジェス）氏とともに「平和の木」を共同制作した。（15ページを参照）（寺西）

国内ひろば

JVC network

インターン紹介

今年の東京事務所インターンは総勢十名。事務所やイベント先などでぜひ声をかけてください。

高橋 真代（アフリカ事業）

看護学生業が忙しいことに反抗し、長期休暇には脱☆日本で現実逃避をしています。今年三月に東アフリカへ渡航したことをきっかけに、インターンで更に学びを深めようと考えました。

田口 沙奈枝（広報／パレスチナ事業）

ガールスカウト、NGO、ユース団体などへの参加を通じて、小学生の頃から国際協力に興味を持っていました。JVCではパレスチナ事業と広報のインターンを一日交代でさせていただくことになったのですが、どちらにも全力で取り組み、倍以上のことを吸収したいと思います!!

貝塚 乃梨子（カンボジア事業／カンボジア市民フォーラム事務局）

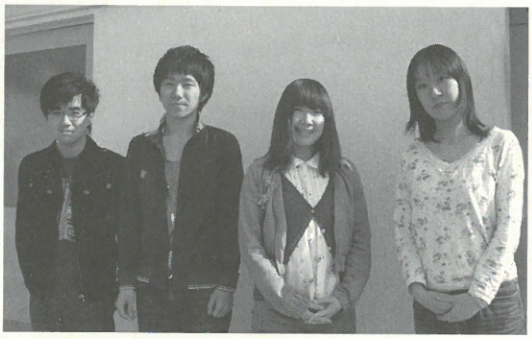
JVCとは「カンボジア市民フォーラム」のシンポジウムでボランティアをしたことで出会いました。今年度の抱負は、つねに学ぶ姿勢を忘れず、人とのつながりを大切に過ごすことです。

木室 志穂（ホームページ）

戦時性暴力の問題に関心があり、二年前から中国の海南島に通って被害者を訪ねるようになりました。通ううちに彼女たちが住む中国の農村の今を知るようになり、農村開発に興味を持つようになったのがJVCのドアを叩いたきっかけです。

吉田 さくら（会員担当）

昨年カンボジアに語学留学し、カンボジアに関心のあるNGOでインターンをしてみたいと思い、応募しました。まだ始まったばかりですが、インターンをはじめてよかったと思うことがすでに多々あります。何か自分もJVCに貢献できるよう頑張ります!



■右から、高橋、田口、貝塚、木室、吉田、廣田、浅岡、塩塚、BRUNO、MO。

廣田 沙陽子（広報）

大学では国際人道法を専攻しています。国際協力やNGOに興味があり、インターンとして参加することにしました。今年度は卒論や大学院入試などやることがたくさんありますが、我が家で犬猫と過ごす時間も大切にしたいです。

浅岡 利咲（アフガニスタン事業）

二年前に聴いた代表の谷山さんの講演会でJVCのスタンス・考え方に強く共感、就職活動の前にぜひNGOの仕事を知りたいと思い応募しました。最近はアフガニスタンもよくニュースで取り上げられるようになりましたが、よく知らない人もまだまだ多いはず。より多くの人に知ってもらえるようにイベントやボランティアチームの活動などを積極的に行ないたいです。

塩塚 祐太（パレスチナ事業）

昨年一年間、パレスチナボランティアチームで活動し、パレスチナのことをもっと知りたい、もっと関わりたいという気持ちからインターンに応募しました。現在はアラビア語の勉強に奔走中です。パレスチナのことをもっとたくさんの人たちに知ってもらいたいと思っています!

Ochi BRUNO（イラク事業）

現在大学で国際関係論を学んでいます。その中で、「理論を学んで、その知識は実際にどう人の役に立っているのだろうか」が気になっていました。その疑問を動機にして、JVCと出会いました。これから、人に貢献できる自分になりたいと思います。

Karen MO（調査研究・政策提言／ODA改革ネットワーク東京事務局）

社会人を四年近く経験したあと、大学の専攻でもあった国際関係・開発の方面にキャリア転換したいと考えました。活動の幅が広く、現場だけでなく政策にも関わることができるのがJVCの魅力だと思います。今は開発援助に関する情報の収集と発信、ODAネット事務局を担当するかたわら、大学院留学を目指してコツコツ勉強しています。

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVCへの募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC募金（郵便振替）

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC東京事務所

3月計　2,984,751円
4月計　2,159,420円

	3月	4月
無指定	242,184円	85,625円
タイ	62,000円	0円
カンボジア	9,850円	129,512円
ラオス	209,850円	510,180円
ベトナム	9,850円	3,000円
南アフリカ	0円	3,300円
パレスチナ	1,596,017円	1,392,428円
アフガニスタン	244,000円	22,000円
コリア	0円	0円
イラク	111,000円	13,050円
スーダン	500,000円	325円

②犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

3月計　92,700円/18件
4月計　119,500円/18件

③ JVCマンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

3月計 1,862,050円/1,566件
4月計 1,898,850円/1,590件

編集後記

部屋の掃除のついでに、溜まっていたビデオテープのDVD化に着手した。前回＆前々回のワールドカップや年末年始のBSドキュメンタリー一挙放送などがある一方で、一番観たいと思っていた07年の3大陸トーナメントが見当たらない。灼熱のアジアカップを経て、オシム・ジャパン＝日本サッカーの可能性と課題が見えた試合なのに。なぜ残していないのだ、俺のバカバカ！(H)

平和を「構築」しなくてよい世界へ——

ボランティア　中川 透（なかがわ とおる）

■共同制作で描かれた「平和の木」。右下の1/4は平壌にて製作予定。

『南北コリアと日本のともだち展』の一環として、韓国から来日した子どもと日本の子ども（朝鮮学校の生徒を含む）が参加するワークショップが5月16日に東京・水道橋にて開催され、私も企画運営ボランティアとして参加した。例年とは異なり、今年は東京、平壌（ピョンヤン）、ソウルの三地域でワークショップを行ないながらひとつの絵画作品を完成させ、秋に東京で絵画展を行なう試みだ。

午前中は、初めて会う子ども同士が仲良くなることを目的として、体を使ったアクティビティやオリエンテーリングなどを行なった。特にオリエンテーリングは好評で、子どもたちは言葉の壁を乗り越え、協力しあってゴールを目指す過程を楽しんでいた。また、昨年『ともだち展』で平壌とソウルを訪問した中学生の発表にも、みんな熱心に聞き入っていた。

午後にはメインイベントである韓国の絵本作家・柳在守（リュウジェス）氏の進行による共同製作が行なわれた。柳氏が描いた大きな「平和の木」の下絵の上に子どもたちが平和をイメージしながら自由に絵を描いていった。その奔放さに、普通の落書きになってしまうのではと心配したが、最終的に柳氏が手を加えてすてきな作品となった（＝写真）。柳氏といえば、昨年ソウルの屋台でお会いした際の、無邪気な子どものようなイメージしかなかったのだが、さすがは芸術家。子どもたちと一緒に描いているときの想像力、そしてできあがった「平和の木」の素晴らしさには目をみはるものがあった。

私が『ともだち展』に関わって7年、ソウルや平壌で開催された絵画展にもたびたび同行し、たくさんの子どもたちに出会ってきた。そして中高生へと成長したその子どもたちは、今、私の横にいる。ボランティアとしてこのイベントの運営を補助してくれているのだ。「自分たちのまいた種が芽吹いた」などと大それたことは言えないが、このイベントの意義を子どもなりに受け止めながら、立場を変えて関わり続けてくれている。企画者として、これ以上の喜びはない。

『ともだち展』の大目標は「東北アジアの平和構築」と言えると思う。北朝鮮政府の強硬姿勢や冷え切った日朝関係ばかりが目立つ昨今だが、楽しく交流している子どもたち、また、自分なりに考えイベントに継続して関わってくれている子どもたちを見ていると、この子どもたちが大きくなった時には、あえて「構築」せずとも平和が当たり前にある日々が来ること、少なくとも現在よりはそれに近い姿となることを信じて疑わない。

JVCウェブサイト 会員専用ページパスワード（2009年7月～8月）：
Ap9bmN72Qi

JVCウェブサイトの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。

暮らしを彩る道具

LIFEWORK ITEMS

87

Cambodia

自家用の小舟

湖上生活をしている人々の交通の足である小型の舟。
買った野菜を持ち帰るところか、それとも販売する側だろうか。
櫓をこぐ男の子の手つきもさまになっていた。
（トンレサップ湖にて撮影）

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回この会報誌と年次報告書をお届けします。

◎一般会員　10,000 円
◎学生会員　5,000 円
◎団体会員　30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。
→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数（6 月 5 日現在）　合計 1,316 名
（正会員 636 名、賛助会員 680 名）

■オリエンテーション（説明会）にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料。予約不要です）

◎第 1 月曜日午後 7：00 － 8：30
◎第 2・第 4 土曜日午後 2：00 － 3：30
※会場は JVC 東京事務所です。

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙 90%、間伐材パルプ 10%）で作成しました。

Trial & Error（試行錯誤）二百七十四号
一九八二年八月十六日 第三種郵便物認可
二〇〇九年六月二十日発行（通巻二百七十四号・隔月二十日発行）
発行人＝谷山 博史
編集人＝大野 和興・清水 俊弘
編集スタッフ＝細野 純也
発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇・八六〇五 東京都台東区東上野一・二十・六 丸幸ビル六階
電話（〇三）三八三四・二三八八 FAX（〇三）三八三五・〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング
定価＝五〇〇円（税込）